
殺人鬼は異世界に来てしまったようです

himame

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺人鬼は異世界に来てしまったようです

【Nコード】

N7170Y

【作者名】

himame

【あらすじ】

自分の快樂のために殺し続けた殺人鬼は暇潰しで行なった黒魔術で異世界へと飛ばされてしまった！？剣と魔法の世界の中を殺人鬼はどうやって生き残るのか。これは一人の殺人鬼の物語——だよ
ね？

最近の殺人鬼は異世界にいけないと駄目らしい（前書き）

「殺人鬼？いえいえ俺はただ殺すのが大好きなだけです。」

b y 主人

公

最近の殺人鬼は異世界にいけないと駄目らしい

既に空は黒く染まり綺麗な満月が見える晴れた夜空。周囲を山に囲まれた村があつた。

「
・
・
・
・
・
こんなもんか。」
」

その村の中を一人の男が歩いてゐた。年は十八歳程だろうが、全身を黒いコートで包み月明かりに照らされたなか頭にかぶるフードから覗く白い髪とその間から僅かに覗く妖しく光る赤い瞳。その姿はまるで鬼のようであつた。男は口元に笑みを浮かべ手で引き摺つてきたものを投げた。

「これで最後——と。」

男の投げたものは地面に鈍い音を發てて落ちた。その投げ捨てられたものからは赤黒い液体が流れ出る。やがて月明かりがその投げ捨てられたものを照らす。

それは人だつた。顔は恐怖の色で染めた表情で固まる老婆の死体。男はそれを見て笑を深める。

「いやあ、苦勞したねえ。．．．ま、その分中々の光景なんだけどさ。」

[illegible]

死体はどれも絶望したような表情や恐怖で歪んだ表情ばかりだ。ある者は片腕を失いある者は顔の半分が消し飛んでいる。なかには腹が裂け臓物が出ているものもある。その死体に囲まれた中男は愉悦に染まった顔で笑っている。

「さ、始めようか！この俺の今世紀最大のショーを！！」

男は死体の中を歩きながら叫ぶ。男は殺人鬼だった。今まで何千何万という数の人を殺し続けてきた生粋の殺人鬼。

やがて殺し続けてきた男は退屈しないよう趣向を凝らして様々な殺し方をするようになった。これもその一つ。今では誰もが口を揃えてこう言うだろう。「有り得ない」と。彼が行うものはそう――
――黒魔術だ。

よく見れば死体は何らかの模様を描くように配置されているのが分かる。直径は恐らく100mを程のもの。それを描くのに犠牲になった村人の数は実に100人を超える。男は別にこれが失敗しても構わない。只自らの退屈を紛らわせる為だけに行なっていることだ。失敗しても場が白けるだけ。

「（いや、それは嫌だな。）」

そう考えながらも男はこれをやめることはない。やがて男は魔方阵から出ると鈍い輝きを放つ一つのナイフを取り出す。男はそれを持つと躊躇うことなく自分の指を切る。切り傷からは真っ赤な血が少しずつ流れ男はその流れ出る血をうつとりとした表情で眺める。その様子は誰が見ても気が狂っているとしか思えないだろう。やがて血は一滴の滴となって方阵へと落ちた。

コオオオ

血の滴が触れた直後方陣からは僅かな光が漏れる。

「あ？」

男はその様子に首を傾げる。男としてはこれが成功するとは思わなかった。いや、成功して欲しいという思いもあったがそんなものは明日地球が滅ぶという何万何億分の1でのものでしかない。徐々に溢れ出る光を見て男はもう我慢しきれないとばかりに盛大に笑った。

「くくく、ふふ、くかかかヒヤハハハハハハハハハハ！！！！！！」

男は手を広げ笑う。その瞳は無邪気な子供のように輝いていた。

「おいおいおい、スツゲエなあ！スツゲエよ！！何だ何だ何だあ！？何が起きるってんだよ！？悪魔か？天使か？何でもいいから俺を満足させてくれよ！！！！」

その言葉と共に飲み込まれていく男。やがてその光は男の視界を白く塗りつぶし

男は草原の中に立っていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・Why？」

草原でポツンと立ち口を開いた男の間抜けな声は嫌に響いて聞こえた。

あー、変な光に巻き込まれた俺だ。取り敢えず現状を把握しようとして動き回ったんだが、どうやら俺の荷物は近くに落ちていたようだ。いやあ、助かったね。今回村一つ潰すのに弾薬と火薬と後食料とだ、いぶ持つてきたからな。

「これ持つて辺り散策するか。」

不可解なことが起きたら取り敢えず口に出せ。それで結構頭の中が整理されるもんだ。……少なくとも俺は。

「原因は十中八九あの黒魔術。」

まさか成功するとはねー。どんなものか知らないけど。本にあったの適当にやっただけだし。

「あんだけ殺した甲斐があつたつてもんかね。」

俺はその時の光景を思い出して思わず笑みを浮かべる。今までの中でも結構面白かったほうかな。興奮したもんだね。

「……………」

ま、何にしても現状把握、現状把握つと。まず俺の周囲に広がっているのは草原。まあ、これといったものはなし。さらに遠くに森が見えるな。他は……………何もなし。

「情報なさすぎだろ。」

思わずそう呟いてしまう俺は悪くない。……疑問に思つかもしれないが俺はヒトを殺したがる以外は一応まともだぞ？

「まずは森行つて。ほかは後で決めよ。」

行動しないと何も始まらねえ。俺は木箱の中にあつた付けそうな火薬と弾薬それに食料をカバンに入れ森へと向かった。数分後に聞こえた置いた火薬の爆発音をBGMにして。

只今森の中でございます。リポーターはこの俺。

とまあそんな感じで進んでるが、あれだ。草原と森の中違いすぎじやね？なんだか猿だか鳥だかよく分かんねえ声が聞こえる。

「……………今日の晩御飯は何でございましょうか？」

そんな呑気なことを言っている俺の前に現れたのは腕が2m位ありそうな猿なのかゴリラなのかよく分かんねえ生物。見た目は猿っぽいが多分体はゴリラ。何か筋肉がとんでもねえもん。それで俺の記憶で該当するのはゴリラ。何千何万とヒトを殺してきた俺には分かるあいつの異常さが。俺の目は人体構造が人に近けりや近いほどそいつの行動、構造が手に取るように分かる。

「ウホッ！キキキ！！」

何か猿ゴリラ（俺命名）がどつちなのか分からねえ鳴き声を上げて俺に飛びかかる・よし、なら

「俺流初対面の方へのご挨拶——！！」

俺は飛び掛る猿ゴリラの顔面に右ストレートを放った。その拳は驚くほど綺麗に決まり反対に猿ゴリラの拳は俺を外し後ろの木を挟る。殴られた猿ゴリラは顔面を仰け反らせそのまま吹き飛ぶ。因みに猿の速度は常人より遥かに速い。俺がそれを捉えられたものはあるものの御陰だ。

俺は頭のどこか（どこか忘れた）がぶっ壊れてて本来ヒトがセーブしている力を俺は全て引き出すことができる。御陰で小さい頃から俺の体中の骨が折れまくった。だがその肉体を極めればそいつはどうなると思う？ 答えは

「最強の肉体持った人間の出来上がりだー！！！！！」

俺は吹き飛ばされた猿ゴリラの顔に躊躇なく踵落としをする。その衝撃で猿ゴリラの顔面は見事に変形し白目をむいている。あれ食らってまだ生きてるのかよ。

俺はポケットからナイフを取り出し

「お疲れさんつしたー。」

首を切り裂いた。猿ゴリラは二、三度跳ねるとやがて動かなくなつた。

「・・・見事に地球外生命体です。本当に（ry」

改めて猿ゴリラの全身を見た俺はその姿に此処が少なくとも日本ではないと判断した。というかあの魔方陣の時点で大体予想つくけどさ。

俺は木々の隙間から日が暮れてきたのを確認するとそこらへんから木の枝を持ってきて火をつける。

今日は此処で野宿かね。俺はそう考えながら明日からの行動を考

えていった。

P S : 猿ゴリラの肉は少し固かったです。

殺人鬼はRPGのラスボスに挑戦したようです（前書き）

「怪しい人に声をかけられたら？右ストレートでこんにちはだろ。」

b

y主人公

殺人鬼はRPGのラスボスに挑戦したようです

おはようございます。太陽が憎たらしいほどに輝いてやがる朝でございます。

「・・・・・・・・・・。」

まずは周囲の確認。相変わらず周囲は木々で埋めつくされてる。

「・・・・・・・・どうせなら夢であって欲しかった。」

俺はそう目の前の現実になんて愚痴りながら立ち上がる。化け物どもは寝る前にピアノ線を周囲一帯に張り巡らせたから一応大丈夫だと思うんだが。念には念をと言うことでピアノ線を見る。

「わお。」

一部のピアノ線が血塗れになって張ってあるのを発見した。そしてそのピアノ線に引っ掛かっているよく分からない獣の死体。チータのようにも見えるがその死体には目が三つあり角が生えている。さらにそこからすぐ近くにはもう一つの死体。・・・・こいつらって学習能力ないのかね。何かもう一つの死体はゲームで出てきそうなゴブリンの様な死体。

「・・・・・・・・・・?」

見ればゴブリンが腰に着けている巾着袋から鉱石のような赤い欠片が見える。俺はそれを取り出すと日に照らして眺める。

「・・・・・・・・何だこれ？」

日に照らされキラリと光る赤い欠片。俺は取り敢えずそれをポケットの中に入れる。取り敢えず巾着袋にはもう何も無いようなので獣の死体を見る。

「・・・・・・・・朝飯にするか。」

俺は獣の死体を掴むと寝床にある木の枝を組み再び火をつけた。これはなかなか・・・・・・・・。

朝食を食^{けもの}べた俺はピアノ線を回収し鞆を持つと歩きだした。

「獣はなかなか・・・・・・・・ただ実際に戦って仕留められるのか。」

生憎衝動に駆られて殺すただの快樂殺人者じゃないんでね。先のことも考えて行動しないと後で痛い目を見る。現にそういつた奴を何度も俺は見てきた。

俺が暫く歩いていく周囲の草がガサガサと揺れる。俺はその音を聞くと共につい条件反射で

ダァン！！

懐からデザートイーグルを取り出し引金を引いた。それと共に放たれる銃弾と硝煙の臭い。放たれた弾丸は一瞬で目標へ到達し

「ギャ！？」

目標は短い悲鳴を上げ血飛沫と共に倒れた。俺は銃とナイフを構え周囲を警戒する。すると草が揺れると共にピアノ線に掛かっていたゴブリンとよく似た奴らが飛び出してくる。

「・・・・・・・・・・。」

数は10、いや俺に向けられている殺気の数15。まだ何処かにいやがるな……。ゴブリン共の表情にはハッキリとした殺意と憎悪が受け取れる。さっきの一匹を殺したことを恨んでるのか？

「中々仲間思いじゃねえか。・・・けどよ。」

ダン！

俺は一匹のゴブリンに向け引金を引く。放たれた弾丸はゴブリンの眉間に穴を開け、また一匹が死んだ。

「俺は優しくねえからよ。」

流れ出る血から漂う鉄の臭いと銃口から昇る硝煙の臭い。それは俺を興奮させ殺人鬼としての本能を刺激する。

「精々足掻けや、虫螻があー！！！」

俺は目の前にいた一匹のゴブリン目掛けて駆ける。目の前で突然仲間が死んだことに動揺しているのだろう。ゴブリンはろくな抵抗も出来ず首を切り裂かれ血飛沫を上げながら血の海に沈む。俺は頬に掛かった血を舌で舐める。

「ヒカカカカカ！！！！脆すぎだろお！？殺る気あるのかあ？」

再び駆ける俺。残りのゴブリン達は状況を理解できたのか俺へ向かって殺到する。振り下ろされる棍棒、俺はそれを片手で受け止めるとそのゴブリンの首を掴みへし折った。骨の折れる鈍い音がしゴブリンの首はぶらぶらと揺れる。

「ギャア！！！」

俺が一匹のゴブリンに集中していると背後からもう一匹のゴブリンが俺の頭に棍棒を振り下ろす。

「んなもん食らうかよぉ！！」

俺は飛び掛ってきたゴブリンに先程の首が折れた死体をぶつける。それによってゴブリンのバランスが崩れ後ろにいた仲間達を巻き添えにして転倒する。それを見た俺はそのゴブリンにピンを抜いた手榴弾を投げその場を離れる。背後から俺を襲う爆音と衝撃、俺は転がりながら体制を立て直すとその爆心地を睨む。其処にあるのは小規模なクレーターそして辺りに飛び散っている肉塊と血。俺はそれを見て口笛を吹く。

「随分スッキリ消えたなあ。」

あれだけの距離だったんだ当然俺も無事な訳がない。左手に走る痺れと痛み。火傷で済むってのは人間やめるとしか思えないな。

「残りは5匹。さあて何処にいるんだい？」

手の中でナイフをくるくると回しながら俺は周囲を見渡す。次の瞬間俺の脇腹に刺さる矢とはしる痛み。

「ギャギャギャー!!」

ゴブリンは俺に当たったのが嬉しいのか声を上げる。その行動に俺は口元を歪ませた。やっぱこいつら馬鹿だ。

「死んじまえよお!!」

俺は声が聞こえた場所へ弾丸を連続で放つ。ゴブリンは苦し気に呻きやがて倒れる音が聞こえる。

「あと四匹。さあ次はどいつだあ?」

その言葉と同時にまた引金を引く。そしてまた聞こえる血飛沫と断末魔の声。

「さ、残りは三匹。」

ガサガサという音共に聞こえる三つの足音。ただその足音は徐々に遠ざかっている。

「………逃がすと思っただけなのか?」

先に手を出してはいすみません? なんでも聞いてもらえると嬉しいのか? 俺はその足音の下へと駆けていく。

「舐めてんじゃねえぞ。小鬼風情が!」

俺は口元を歪め瞳を輝かせながら駆ける。やがて見えてくるのは三匹のゴブリン。奴らは俺の半分程の身長しかないんだ当然歩幅など

俺より遥かに小さい。見えてきた標的を前に俺は舌舐りをする。
良いぜ良いぜ良いぜ。そうだその命を燃え上がらせる！俺にその命
の燃え上がる様子をみせてくれ！！

俺は手に持ったデザートイーグルを奴等に向け、引金を引いた。炸
裂する弾丸、血飛沫を上げ血の海をつくっていくゴブリン。

「堪んねえなあ！！これだから殺すのは止められない！！」

俺は額に手を当てて顔を覆いながら高笑いを上げる。最早此処が何
処であろうと構いやしない！これが俺が求めたもの。この血風と快
感を感じることができるこの場所が俺が求めたものだ！！ダイヤの
金の輝きすらも凌駕する人の魂の輝きそれを俺は見続けたい！！！！

「だからどうよ爺さんよお？」

俺の背後に立つ一人の老人。見た目は只の老耄だが中身がまるで違
う。何か巨大なものを無理矢理人という容物に詰め込んだ化け物だ。

「是非とも俺と踊ろうじゃないか。爺は好みじゃないんだがな。」

俺が問いかけると目の前の老人は笑う。

「ふふふ、こんな老耄と踊ってくれるのかのお。良いじゃろう。」

老人が何処からともなく一本の杖を取り出すと地面にコンとぶつけ
る。それが合図かのように老人の背後に出現するのは無数の方陣。

「たつまんねえ。こんなに昂るのは久しぶりだよ！！俺にもっと生
を実感させやがれえ！！！！」

俺は今までにない程の速度で目の前の老人に疾走する。老人はその姿を見てニヤリと笑った。

「くくく、いいな。この俺『魔王』に挑むとはな。」

一瞬老人の姿がぶれ、一人の長身の男が現れる。全身が黒く牙のようなものを生やし、背中には翼が生えている。

こいつは言った。魔王だと。俺は思わず笑を浮かべる。おもしれえ。

「見せてくれよ！魔王様の實力つてやつをよお！！！」

降り注ぐ方陣からの光をくぐり抜け俺は奴の目の前に出る。振りかぶる右腕。相手も俺と同じように左腕を振りかぶる

「ッラア——！！！」

「フツ——！！！」

ぶつかり合う拳。だがその決着は一瞬だった。

メキヤ

鈍い音を発て潰れる俺の右腕。それは骨が折れ腕から突き出ていた。

「——」

その痛みに俺は顔を歪める。だが——

「くたばれよ。」

最後の力を振り絞り放たれた銃弾。それは魔王の眉間を確実に貫いた。

「ムウ——」

魔王は僅かによるめき仰向けで倒れていく。その様子を見て俺の意識は闇の中に落ちていった。

「・・・・・・・・・・。」

あ？ここ何処だよ。俺はそう思いながら起き上がる。既に夜空には満点の星空が広がり大地を照らしている。あの爺は何処に行きやがった。つか何で俺生きてんだよ。

俺は自分の右腕を見る。そこにはあるのは無事な右腕ついでに火傷も綺麗に治っていた。

「む、目覚めたのか。」

俺が立ち上がって体の調子を確認していると茂みの奥から魔王とか名乗っていた男が現れる。男は俺の視線を気にせず近くに座ると隣を叩く。・・・・座れと？

聞きたいこともある。俺はそのことを考えると魔王の隣に座る。

「・・・・・・・・何で俺を生かした。」

「開口一番がそれかのう。」

魔王は面倒臭そうに頭を掻く。うるせえよ、俺には重要なことなん

だよ。

「主には興味があったからのう。『門』を開けるものなど何千年と
いなかったからのう。ましてや向こうの者が開けるなど初めてじゃ。」

「『門』？」

「主ではないのか？」

魔王は首を傾げる。・・・門。思い当たるのはあの光。

「・・・たぶん俺だ。」

「やはりか。門を開けられるなど儼ぐらいじゃからのう。」

魔王は頷くと俺に顔を近づける。

「で、どうやって開けた？」

質問ばかりだなこいつは。少しは俺にもさせやがれ。

「大量のヒトの死体を集めて模様を描いたんだよ。そしたら光に包
まれてここにいた。」

「人？主はどれだけの人間を殺した？」

「さあ、その『門』ってやつを開けるのに百人近く、今まで全部含
めて何千何万・・・よく覚えてねえよ。」

俺にとって殺すのは飯を食うのと同じくらい自然なこと。正確な数なんて覚えてる訳がない。俺の言葉を聞いて魔王は愉快そうに笑った。

「フハハハハハハハ！！！！主は本当に人間か！？そんな者など聞いたことがないぞ！！？」

「当たり前だ。他にもいたら世の中の人間は殆ど死んでるぞ。」

その言葉を聞いて魔王はさらに笑う。うるせえんだよ。

「で、今度は俺の番だ。向こうってのは何だ？」

まず最初に聞きたいこと。此処がどこなのか、向こうとは何なのか。話とあのゴ布林達で大体の予想はつくが・・・

「向こうってのは主が生きていた世界じゃ。この世界は『アリアンロッド』と言ってな。お前達の住む世界とは別の世界じゃ。」

・・・さいですか。いや、むしろゴ布林やら魔王やらが地球にいる方が驚きだけどさ。慣れっつてのはとんでもないな、ここが異世界だと言われてもまるで驚かない。

「で、魔王様は何でこんな所にいるんでしょうかね？」

皮肉を込めて俺は魔王に問う。魔王は腕を組んで悩むと何か思いついたのか言った。

「実は後継者を探していてな。ちょうど門を開いた者がいたから押しつけ・・・もとい継いで貰おうかとな・・・。」

「巫山戯んな。」

俺はそう吐き捨てて立ち上がる。そして歩き出そうと踏み出し――
―足を掴まれた。

「離せ。」

「まあ、待て。主はまだこの世界のことを知らんじやろ？」

確かにそれはそうだ。俺はこの世界の知識がまるでない。当然あんな化け物共についてもこの世界の人間についても……。

「まあ、教える代わりに継げとは言わん。話を聞け。」

……ただ教えてもらえるのはありがたい。ただ程怖いものはないとも言うが……。

「座れ、座れ。」

そう言つて魔王は再び隣を叩く。俺はメリットデメリットを即座に考え、座った。

「いいか、この世界には魔物というのがいる。まあこれはお前が殺していたゴブリン共が該当する。」

あれ本当にゴブリンだったんだ。

「魔物は総じて知能が低い。なかには人間以上の知恵を持つものがあるがそんなのは稀だし。自ら無駄な戦闘というのは行わない……」

たぶん。」

こいつが一気に信用できなくなった。

「我らは姿は魔物に似てるがれっきとした魔族という生き物じゃ。」

ふむふむ、翼、角、牙があるやつは魔族＝信用できない、と。

「今変なことを考えなかったかのう？」

「気のせいだろう。で、他は？」

「まあ、種族は他にもあるが面倒くさいから先に他の説明じゃ。」

グダグダ過ぎんだろこいつ。俺は深いため息を吐く。

「この世界には魔法というものがあつての。それぞれ炎、水、風、大地、闇、といったものがあるのう。因みに魔王は全ての属性が使えるんじゃ。」

「あ？じゃあ、他の奴は全部は使えないのか？」

「うむ、複数使える者はいるが全ては無理じゃ。」

魔王はそう言って言葉を区切る。

「そもそも、魔法には今の以外にも呪い、聖、召喚、無、と様々なものがあるからのう。」

「ふん。」

面倒くさいなそりゃ。

「あとは魔導具とってのう。魔法でも実現不可能なことを可能にするアイテムがあつての。それぞれランク分けされておる。」

魔王はそう言つと溜息を吐く。

「他にも色々あつてのう。正直説明すんのは面倒くさいんじゃ。」

ぶつちやけんじゃねえ。

「と、言つわけでの？主に直接この世界の知識、魔法の扱い方、や魔力を叩き込もうと思つての。」

魔王はそう言つて俺の頭を掴む。俺は逃げることも許されずに押さえつけられる。そして流れ込んでくる知識。それは激痛となつて俺を襲つ。

「ぐっ……が……ぎぎぎぎぎ！！あ、たまがあ！！！！つう……つてええええええ！！！！！！」

頭が割るような痛み。俺は我慢できずに頭を抑えて地面をのたうち回る。

「がああああああ！！！！痛い痛いいたい痛いイタイイタイイタイイタイイタイイ！！！！！！」

俺は思わず叫んだ。魔王が何か言っているがそれすらも耳には入ってこない。鼻からも血が流れ出てくる。やがてその痛みに耐え切れ

なくなった俺は再び闇の中へと落ちていった。

殺人鬼はRPGのラスボスに挑戦したようです（後書き）

感想、批判、ご意見があったらどうぞ送ってください。

どんな奴でも絶対に驚かないなんてことはないそれは殺人鬼も例外じゃなかった

「友に秘密を知られたら？何が何でも口を封じるの……一部を除いて。」

b y 魔王

どんな奴でも絶対に驚かないなんてことはないそれは殺人鬼も例外じゃなかった

Good morning 太陽。今日ほどお前を消したいと思っ
た日はねえよ。昨日俺が魔王に流し込まれた知識。俺が意識を失っ
ても激痛で再び意識を覚醒させてきやがった。意識を失っては激痛
で目が覚める。地獄のような時間だったぞ。ようやく治まった頃
はもう日の出だ。・・・あの魔王死ね。

「・・・・・・・・・・」

実際俺はもう口を開く気力すらない。思考は正常だが如何せん体を
動かす気にはならん。耳を澄ますが俺の他に動いている音はしない
から魔王は何処かへ行っているのだろう。これで放置と言ったら
絶対にあいつを殺す。・・・しかし

くう

俺の腹はまだまだ気力があるようだ。こんだけ元気に空腹を訴えて
るのだから。

「・・・・・・・・・・起きよう。」

日が地平線から完全に出た頃。俺はようやく気力が戻ってきた。

「^{あれ}激痛で体力を相当もってかれたし服も血塗れになっちまった。」

おまけに顔も血塗れだ。不快で堪んない。俺はまだ動きたくない

いう体に鞭を打って立ち上がる。そこで初めて周囲の様子に気づいた。

「・・・・・・・・何処だ此処。」

俺の背後に広がっているのは鬱蒼とした森、ここは最初とそこまで違いはないが問題は前。俺の眼下に湖が広がっている。そう眼下、つまり俺は今上から湖を見ていることになる。今、俺がいる場所は湖より遥かに高い崖の上だった。

「魔王がやったのか？」

俺は一步前に出ようとしてバランスを崩す。

「・・・・・・・・貧血か？」

顔面は見えないが服には大量の血液が乾きこびりついている。良く俺死ななかつたな。自分の運に感謝しつつ俺は鬱蒼とした森の中に入ってしまった。

「・・・・・・・・あやつは生きてるかのう。」

僕は小さな湖の辺で呟く。やれる限りのことはしたし回復もこまめに行なった。これで死ぬ確率は低いじやろうが絶対ではない。

「後継者を死なすのはもったいないからのう。」

あれがただの馬鹿だったら助けようなどとは思わんし継がせる気も

ない。そんなことをしたら僕は恥を晒すことになるからう。

「……………しかしこの姿も疲れたのう。」

老人も嫌じゃったが。この姿はごつくて気持ち悪いからのう。威厳は出るんじゃないが…………。

「やはりこれが一番だのう。」

我はそう言つて元の姿に戻る。うむ、やはりこの姿が一番じゃ。我はそう言つて服を脱ぎ湖へと入ろうとし

「おい、ま……………おう？」

その声に思わず我は後ろを振り向く。そこには昨日助けた人間の姿。ヤバイヤバイヤバイ。この姿を、女の姿を見られた！？……………しかも裸。

森の中を歩いていたら俺は途中で見つけた小川を辿っていた。たぶんこの水があ湖に繋がっているんだろう。

やがて小川の先に小さな湖が見えてくる。あのでかいやつ程じゃないが十分だ。俺はその湖へ歩いていくと丁度足を水に浸している魔王がいた。

「あ？」

俺が声を掛けようとするとう魔王の姿が突然ぶれる。その現象に少し驚きながらも俺は近づこうとすると

「おい、ま」

「やはりこれが一番じゃ。」

美女が現れた。

「・・・おう？」

その姿を見て俺は今まで見てた魔王は実は幻なのではないかと思っただ。だってあれだぜ？あの敵つい面して牙生やして翼生やした奴だぜ？それがいつの間にか美女になるって・・・。
俺はその場で頭を抱えながらとうとうイかれたのかと考えていると先程の美女が声を掛けてくる。

「死ね！！」

「うおっ！？」

突然、美女は俺へと飛び掛ってくる。思わず反射的に俺は転がってその場から逃げた。つつか服着ろ、服！！美女は裸を見られたのが余程ショックだったのか涙目になりながら俺を追撃しようとする。しかし、あれだ。いいね。美しいとしか言いようがないプロポーション。それに絹のように美しい黒髪。そして宝石のように輝く紫の瞳。それを見た俺は笑を浮かべる。

いいね、どうしても切りたくなっちゃうじゃねえか。俺はデザートイーグルとナイフを構えると目の前にいる美女へ駆ける。

「ふん！生かそうかと思ったが！！我の姿を見て生きてられると思うなよ！！し、しかも、は、はだ、裸まで見るとは！？継承などど

うでもいい！！ここで殺してやる！！？」

美女・・・というか魔王なのか？は顔を湯気が出るくらい赤く染め俺に腕を振るう。食らってしまえば消し飛ぶような威力。だが、まだ混乱しているのかその一撃は隙だらけで――

「フツ――」

俺は紙一重でその攻撃を躲すと魔王（仮）の首を掴み木に叩きつける。

「がつ！？」

その衝撃に魔王（仮）は咳き込み俺を睨む。だが殺すことは出来ないだろう。殺ろうと思えば今すぐにでも俺は魔王の首を切り裂ける。俺より魔王が死ぬほうがどう考えても早い。

「お前魔王なのか？」

「当たり前だ！！」

あ、マジで魔王なんだ。

「で、何でそんな姿になってんだ？つか初だなお前。」

「これが私の本当の姿だ！！！そ、それにあ、当たり前だろう・・・。」

魔王は叫ぶが徐々にその声は小さくなっていく。

「は、裸を、み、見られたんだから。」

魔王は顔をさらに赤くし涙目で言う。・・・止めてくれ、凄いい切りたくなってくる。

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

魔王も俺も黙り込む。・・・このまま掴んでも埒が明かない。俺は掴んでいた手を離すと魔王にコートを着せる。俺の服で唯一血の被害から逃れていたものだ。多分魔王が脱がしたんだろう。

「取り敢えずこれでも着とけ。話はそれから聞く。」

「・・・・・・・・・・。」

魔王は俺をじつと見る。おい、我慢してんだからそんな目で見るなとつと服を着ろ。

「・・・・・・・・ありがとう。」

魔王はそう言うのと湖に置いてある服に着替えに行く。いや、体でも洗うのか？

俺は取り敢えず魔王を見ずにさっきの衝動をぶつけるように木に向けてデザートイーグルの引金を引いていく。そもそも印象変わりすぎだ。前の敵つい状態なら文句で何でも言えるがその状態だと俺がみつともないように見える。傍から見たら俺が虐めているようにしか見えないしな。世間の価値観ならあの魔王の姿（美女）は間違はなく美しいとか綺麗と言えるだろう。それもとびっきりの上玉と。

まあ、俺も男だ。そんなものの裸を見ちまったら……切りたくなるだろう？え、ならない？

まあ、ともかく元々言おうと思ってた文句も言えなくなっちまうんだよね。

「……………腹減ったな。」

俺がマガジンに入っていた銃弾を全て撃ち終わり新しくマガジンをセットしていると丁度魔王がやってきた。

「……………すまない。」

何への謝罪かは分からないが俺は無言で渡されたコートを取る。

「構わない。というか俺も服を洗いたいから向こうでいいか？」

俺は魔王の返事も聞かずに湖へと歩いていく。後ろから足音がするからついて来ているのだろう。俺が湖で服を脱いで洗いだすと魔王が隣に座る。

「怒らないのか？我はお前を殺そうとしたのだぞ？」

「別に。むしろ俺の方がすまなかった。」

命を狙われるのは慣れてる。今まで散々殺してきたんだ。当然その分恨まれるし命だって狙われる。裸を見られて襲ってきたってことは此奴にとっては重要なことだったんだろう。だったら狙われるようなことをした俺が悪かったのだろう。俺が謝ったことを意外に思ったのか魔王は驚いた様子で俺を見る。

「い、いや。我の方が悪かった。」

魔王は慌てたように謝る。・・・こいつ本当に魔王か？マジで印象が違うんだが。俺は内心でそう訝しがりながら魔王に気になっていたことを聞いた。

「で、何であんな姿になってたんだ？」

別にずっとあの姿でいる必要などないだろう。

「だって、あの姿の方が威厳があるし、それに魔王として舐められないだろう。」

・・・成程。ようはあの姿の方が魔王っぽいと。けど・・・

「その姿でも十分過ぎるほどのカリスマを感じるんだが。」

何というか。正直厳つい姿の時よりも俺はビビった。感じる力も迫力もこの姿の方が凄かったしさっきの一撃も冷や汗が止まらなかったからな。俺の言葉に魔王は僅かに顔を上げる。

「・・・・・・本当か？」

「ああ、とんでもないほど感じた。」

今の落ち込んでる姿からは全く感じないがな。そんなことを言つてこれ以上落ち込まれるのも面倒くさいから言いはしないが。魔王は俺の言葉を聞いてブツブツ言いながら頷く。あ、くそ。流石にスポンは落ちねえよなあ。服も血がこびり付いて落ちねえよ。俺は傍に置いておいた鞆からシャツを取り出し着替える。

「よし!!」

「あ？」

俺が着替え終わると魔王は勢いよく立ち上がる。そして目を輝かせながら俺を見る。……今度はなんだ？

「人間よ！私もついて行くぞ!!」

「は？」

此奴何つつたよ。ついて行く？俺に？

「うむ、主には世話になったしの！それに主には教えねばならぬことがあるからの!!」

魔王はそう言つて俺に飛びついてくる。やめろ！離せ鬱陶しい!!

「人間よ、主の名前は何というのだ？」

魔王は離れると小首を傾げながら聞いてくる。たぶん文句言つても此奴は聞かないのだろう。昨日と今日で何となく此奴のことは分かつてきたし……認めたくないが。

「響夜、鳴神響夜だ。」

「うむ、我の名前はマオ。マオ・オメテオトル・ヘーラー。マオと呼ぶがいい!」

そう言つて魔王、マオは手を差し出す。取り敢えずはまだ世話になることもあるんだ。俺はそう考えて差し出されたマオの手を握りつつた。

「よろしくな響夜!!」

「ああ、よろしく。」

これがこれからも続いていく殺人鬼と魔王の出会いだった。

あの後から暫く経ち今俺達は焚き火を挟んで向かい合つて話している。

「いいか、響夜。知識を与えたから大体のことは分かるはずだ。まずは魔法の属性についてだ。言つてみるがいい。」

なんとという高圧的な態度。いや、教えてもらうのは俺だから強くも言えないが

「あゝ、炎、水、風、大地、闇、聖、呪、無、空、時、だっけか。」

「ああ。魔法が使えない者もいるが大抵は少なくとも初級の魔法は使えるな。」

「で、俺の魔法ってのは？」

「うむ、それだがの・・・まあ何というか。我は主と繋がっておるから分かるのじゃが。」

「？」

マオは少し難しい顔をする。俺はマオのその様子に首を傾げた。

「主が扱えるのは炎、呪、空の三つじゃ。」

「炎は一般的だっけか。で、空はレアなので……。」

「呪を使えるという者はいないと言っても過言じゃなの。」

「何でだ？」

俺が与えられた知識の中には呪については能力の特徴だけでそんな情報はなかった。

「呪は使えるものは相当限られるんじゃ。まず上手く操れなかったら自分にその反動が返ってくるし、それが使えるのは余程の罪深きものや恨みなどがあるものじゃからな。」

それも大抵操れずに自滅するんじゃが。とマオは言う。

「しかし、主にはピッタリかもしれんな。」

マオはそう言って笑う。それは厳ついときのような豪快な笑いではなく女らしい……お淑やかとでも言えば良いのだろうか。そんな笑いだった。

その姿を見ながら俺はずっと疑問に思ってたことをマオに聞く。

「なあ、俺の手にあるのは何なんだ？」

そう、俺の手の甲。そこにはよく分からない刺青がはいっていた。翼を生やした・・・これは天使だろうか。一本の剣を両手に地面に突き立てるように持つ天使の上半身の姿だった。それは黒く描かれていることから墮天使のようにも感じる。

「・・・・・・・・それは・・・・・・・・あれじゃ。」

それを見たマ才は齒切れが悪くなる。

「あれって何だ。」

「その・・・・我との契約の証じゃ。」

「証？」

魔力を受け取った時のか？

「うむ、我が死んだとき主は我の代わりに魔王になるという魔王の後継者としての証じゃ。」

「・・・・・・・・・・は？」

「だから魔王の後継者の「ちょっと待て、お前これいつやった。」・・・・知識と魔力を与える時じゃ。」

「巫山戯んな！お前シャレになんねえぞ！！」

「良いではないか！魔王になれば最強ともいえる力と全ての属性を使うことができるのじゃぞ！！それにその紋章は我を召喚すること

も出来るし、制限があるとはいえ通信も可能にするのじゃぞ!!」

「そういう問題じゃねえ!!」

畜生やられた! やっぱりタダより高いものはねえのかよ!!?

「…………ハア。」

「そう落ち込むでない。それに知識と魔力を与える以上それはどうしても必要なんじゃ。」

「……………」

「そ、それにあれじゃ、ええと別に、我を殺さなくとも婿になれば……じゃなくて!! ある意味主は家族以上の繋がり……でもなくて…………」

マオ、必死に弁解しようとしてるが話がどんどん変わっているぞ。俺はその衝撃の事実に凹む。そんなものになったら敵ばっか増えて休む日すらなくなんじゃない? 殺人鬼だって休みたい日はあるんだぞ?

「……………寝よう。」

俺はそう言っただけになる。何かマオが慌ててたがんなもん知らん。やがてマオも寝ることにしたのか。静かになった。聞こえてくるのは木々がや草花が風で揺られる音と火が枝を燃やす音だけだった。不思議といつもよりも静寂が心地よく感じた。

「……………響夜。」

「・・・・・・・・。」

「すまなかった。勝手にそんなことをして。」

マオの声は少しだけ震えていた。俺はその声を聞いて静かに溜息を吐く。本当に此奴は・・・・・・・・。

「構わねえよ。こんな結果になったとはいえ、魔力といい知識といい世話になったからな。」

実際もしマオ以外の奴らに出会っていたらこんな素直に話が通じたかどうか分からねんだ。その点でいえばメリットの方が遥かに大きい。

「だから謝んじゃねえよ。」

「・・・・・・・・ありがとう。」

俺はマオのその声を聞きながら眠りについた。

「・・・・・・・・。」

まだ日の出か。俺は太陽の光を感じながら起きようとし、動けなかった。

「・・・・・・・・。」

俺にしがみついているマオ。心無しか随分心地よさそうに寝ている。

「…………マオ。」

俺はしがみついてくるマオの肩を揺らす。だがマオは離れるどころか逆に力いっぱい俺の胴体を締め付ける。

「——ッ」

い、痛い。仮りに魔王。なかなかの力だ。普段から力は抑えているのだろう。でなかったら俺の肉体など即座に潰れちまう。

「ま、マオ……起きろ。おい、マオ。」

俺は少し強くマオの肩を揺らす。早くしろこのままだと潰れるから！

「……………」

俺の祈りが通じたのかマオはもぞもぞと動く。薄く目を開ける。

「おい、目を覚ませ。」

「…………ふわ……響・夜……おはよう。」

そう言っただけで俺から離れるマオ。助かった。なんとか俺の胴体はまっぴたつにならなくて済む。俺は内心でホッとしつつ起きようとする。

「…………ん。」

起きようとする俺にキスをしてくるマオ。……………What？
その突然の行動に思わず思考が停止する。

触れ合う唇。触れ合っているほんの数秒がまるで何時間のように感じる。

「・・・・・・・・・・。」

やがて唇が離れると共にマオは再び眠り出す。先程の光景に呆然とする俺。いや、別にキスが初めてなのだから言うわけじゃない。ただ会ってそこまで経たない奴に突然されたことは初めてだ。やがて意識が戻ってくる俺。マオの顔を見るがマオはまた心地よさそうに寝てるだけだった。

「・・・・・・・・・・意味わからん。」

寝ぼけてたのか？俺は取り敢えず起き上がり荷物から朝食の準備をする。マオがいる分量も多いからな。やがて起きたマオは何もなかったかのようにまたはしゃいでいた。きっとあれは寝ぼけてやったのだろう。

俺はそう結論づけ荷物を整理するとマオと共にこの世界に来て初めての旅に出た。

マオがやけに元気だったのは余談だ。

どんな奴でも絶対に驚かないなんてことはないそれは殺人鬼も例外じゃなかった
感想、批判、ご意見があったらどうぞお願いします。

殺人鬼から見ても魔王にはとても見えん（前書き）

「無性に切り殺したくなることってあるよね？」

b y 響夜

「我を見てそんなこと言うでない!!」

b y マオ

殺人鬼から見ても魔王にはとても見えん

この世界にはスキルつてのがあるらしい。何でも通常^{ノーマル}スキル、特殊^{レア}スキル、固有^{ユニーク}スキルつてのがあるらしい。右へいくほど珍しくその力も協力になるとか・・・。

何故突然こんなことを言ったのかそれは俺のスキルが分かったからだ。

固有スキル：想像形成

固有スキル：魔神の観察眼

固有スキル：鬼神の武勇伝

特殊スキル：魔王の加護

通常スキル：属性付加

つてのが俺のスキルらしい。上から説明していくと想像形成つてのは想像したものを魔力で創るつてもものらしい。ただしイメージが明確でないといふやになつたり効果も小さくなるようだ。で、魔神の観察眼つてのは俺の殺人鬼としての能力、対象の筋肉の動きや体の構造が分かるらしい。鬼神の武勇伝は俺の身体能力のことだと思う。持ち主の能力をすべて底上げするらしい。魔王の加護は言うまでもなくマオが俺につけた後継者として証のせいだ。いちおう能力増強やら回復力増強の効果があるらしい。で、属性付加は持ち主の属性を武器やらに纏わせることが可能らしい。

スキルつてのは経験で獲得するのもあれば最初からもっているもの、あとは魔導具や神器で得られたりとか・・・。

そうそう神器つてのは魔導具のさらに上らしい。何でも神が作ったもので誰も造ることが出来ないものだとか・・・。これには特殊型と形状型しかなくマオ曰く

「神の創ったものに人間が格をつけるなどおこがましいと思ったのじゃろう。」

とのこと。

ま、これは俺が生きる上での知識の確認といったところだ。

「響夜〜。まだなのか〜？」

俺達は今山の上を登っている。マオは知識を与える際に俺に不要だと思ったものは与えなかったらしくこの世界にはまだまだ知らないことがあった。例えば村や街の情報、魔物についてなんてのはマオは何を考えたのか俺に与えなかった。

「うるせえよ。だったら自分で歩け。」

マオはずっと本来の姿のままだが黒いドレス(?)しか持っていないらしく歩きづらいとかほざき俺が背負っている。山の中をドレスとか此奴は何を考えてやる。

「む、響夜。」

「分かつてる。」

俺のスキルと普段から鍛え上げている聴覚は近付いてくる敵の足音を察知していた。俺は背負っていたマオを降ろす。それと同時に現れる魔物。虎、いや狼・・だろうか。額には一本の紅い角を生やし虎のような牙に狼のような体躯ただその大きさは恐らく4、5m程もあるだろう。その体は見るからに強靱で、恐らく銃は効かないだろう。

「気を付けるのだぞ響夜。あれはゴブリンどもより遥かに強いぞ。」

「あいよ。」

丁度良い。此奴で魔法つてのを試してやるか。俺は魔物の注意を引き付けながらマオから離れる。

「遊ぼうぜ猫スケ。まあ人語を理解できるのかは知らねえが。」

俺は魔物を試しにナイフで切り付ける。だがやはりその体に傷を付けることは出来ず魔物は自らの力を誇示するかのように吠える。うるせえんだよ。耳がいてえだろうが。取り敢えず注意は引き付けたので良しとする。

「集中・・・集中・・。」

「力とは支配するもの。」マオはそう言っていた。魔力を俺の意思通りに操り構成する。

「形成・・・呪・・・炎・・・空。」

三つの魔法と想像形成、属性攻撃を使う。想像形成で形を創る。それに呪の属性を付加させる。さらにそれに炎の属性を被せて付加させる。あとはそれを空の魔法で操る。

「地獄車。」

ま、こんな感じが。空中に現れたのは刺を生やした二つの車輪。呪で癒せない傷をつけるという呪いを付け炎で車輪を包む。あとは空でそれを俺の意思で操る。空を使わずともできるが此方の方が敵の攻撃を躲せる。

「殺れ。」

あとはそれを放つだけ。車輪は目の前にいる魔物へと向かう。魔物はその車輪を迎撃しようとする。だが二つの車輪は魔物を挟撃するように立ち回る為魔物は必ずどちらかの攻撃を受けていく。魔物に刻まれていく傷跡としての傷は徐々に増えていき。

「・・・ガア・・・。」

魔物はもはや虫の息と言ってもいい状態だった。俺は懷からデザートイグルを取り出す。確かに只の銃では傷付けられない。・・・なら魔法での銃ならどうよ。

「・・・。」

俺は銃弾を想像形成で構造を組み換え呪の属性を付加させる。そしてその銃弾を魔物に向けて放つ。放たれた銃弾は車輪に注目していた魔物に当たり。・・・爆発した。

「……これは中々良いものだな。」

俺はその結果に満足し車輪を消す。魔物の腹は爆発で飛び散り。傷跡からは焼け焦げた匂いがする。俺はその死体を観察して効果範囲を把握しておく。次使うとき自分ごと巻き込まれたら堪ったもんじやない。

「随分と上手く扱えたの。」

マオは俺に近づいてそう言うてくる。

「まあな、何か創るときに重要なのは腕だ。この場合何かを創るってのは要は想像すればいいんだろ？」

今まで退屈を紛らわせるのに色々やってたんだ。これぐらいは何と出来る。

「ただ、魔力を少し使いすぎじゃな。あれぐらいなら其処まで魔力を使わなくとも出来るぞ。」

「そこはこれからの練習次第だろ？」

「まあ。我に頼るがいい！」

そう言うて胸を張るマオ。此奴は魔王よりも子供みたいな感じだな。

「……………」

俺は騒いでるマオを無視して先へ進む。マオも俺の後を慌てて付いてきた。

「街はまだかのう。」

「お前知らねえのか？」

「詳しい土地など我は知らん。」

マオはやけに誇らしげに言う。・・・それは自慢にはならねえぞ。
俺は呆れながら先を歩いていく。

「響夜〜!!」

「うっ!？」

今何か人間が発するようなものじゃねえ言葉が出たがそれは無視だ。
突然マオが俺に首に手を回して抱きついてくる。首が、首が苦しい。
俺はこれ以上首が絞まる前にマオを支える。

「いきなり抱きついてくるんじゃないねえ！」

「良いではないか。歩くのが辛いんじゃない。」

マオは頬を膨らませて言う。何だ此奴は。俺はマオを背負いながら
山をさらに歩いていく。やがて森が広がり俺達は森から出た。

「・・・・・・・・・・。」

「お・・・・・・・・。」

マオは瞳を輝かせながら感嘆の声を上げる。俺も目の前に広がる光

景を見る。そこに広がっているのは太陽の光を受け輝く海。そしてそこには港と街が広がっている。街は中々大きく多くの建物が見える。

「ほら！行くぞ響夜！！」

マオは俺の手を掴んで引つ張る。

「おい、待てそんな急に走ったら――。」

「ひゃっ！」

俺が言おうと思ったら案の定はマオは転んでしまった。見ればドレスも破けてしまいマオは涙目になっている。

「……ハア。」

泣きたいのはこっちだ。俺はコートを脱いでマオに渡す。

「ほれ、ついでに鞆の中の服やるからそれに着替える。」

こんな姿で街に行ったら絶対に目立つ。只でさえ此奴は容姿がいいんだ。余計に目立つちまう。マオは俺から衣類を受け取ると木の影へ入り着替える。

「……何でこんな疲れなきやいけないんだ。」

俺は深い溜息を吐いて空を見上げる。ああ、太陽がうざつてえ。

「・・・・・・・・でかいな。」

着替え終わったマオを連れて俺達は街に入った。こうやって街の中を見るとやはり此処が異世界なのだと実感させられる。周りには耳や尻尾を生やした獣人、翼や牙を生やした魔族、長い耳が特徴のエルフ、それに毛むくじらのドワーフ、人間もいる。皆やはり俺の世界とは違うものを着て鎧や、冒険者のような服装の奴もいる。その多くが武器を装備している。おそらくこれが知識の中にあつた冒険者って奴なのだろう。

「響夜！あれは何だ？」

マオは街の中は初めてなのかそこら中に目移りしている。これだけなら御令嬢とかで済むんだろう。

「あ？・・・・・・・・ありや街灯・・・・・・・・か？」

この世界に該当なんてあつたんだな。魔導具が何かで制御してるのか？ただその数も少なく恐らく限りがあるのだろう。

「・・・・・・・・。」

さつきからどうも視線が俺たちに来る。服装に問題があるんだろうが、こればかりは仕方がない。先ずは金をどうにかしないとな。

「マオ。お前は金持つてるか？」

俺はマオに聞く。ここでもってないと言ったら・・・・・・・・どうしようか。俺のスキルで創るか？

「一応持っているぞ!」

元気よく言うマオを見て俺は負担が減ったことに内心喜んだ。

「そんじゃ先ずはお前の服を買うか。」

知識を与えられてなかったらこの世界の字なんて分かんねえし。硬貨の基準も良く分かんなかっただろう。マオには一応感謝しねえとな。

「いいのか?」

「構わねえよ。」

不安そうに俺を見るマオの頭を撫でて言う。今更俺の迷惑とか考えんじゃねえ。

マオは撫でられたのが照れ臭かったのか少し俯いて顔を赤くする。

「そうと決まれば先ずは服屋か・・・。」

どこにあるのかな。俺とマオは人混みの中を歩きながら探す。

「きよ、響夜。」

「あ?ああ、悪い悪い。」

どうやらいつの間にか歩くペースが早くなっていたらしい。俺はマオとはぐれないよう歩くペースを落とす手を繋ぐ。

「響夜？」

「はぐれたら面倒臭いだろう。」

その行動を不思議そうに見てくるマオに俺は言う。何時の間にか随分お人好しになっちまったな。

「ほら探すぞ。」

「うむ！」

マオは満面の笑みで頷くと上機嫌で歩き出す。俺もその手を握りながらマオの隣を歩いて行った。

「
」

満足そうな様子で歩くマオ。そして隣でマオの服を持ちながらぐつたりとした様子で歩く俺。女の買物というものをどうやら甘く見ていたらしい。マオは真剣な顔をして何着も試着し俺や店員に感想を聞いたりし、納得したら新しいものを探し出す。それが何時間も・

「・・・疲れた。」

もうとつとと宿を探して休もう。俺はそう考えてマオに言う。

「マオ、そろそろ宿を探すぞ。」

確かこれだけ買い物してもまだ余裕があったな。お前の一応ってどれ位だ？

「うむ、何処がいいかのう。」

新発見だがマオの勘は異常なほどに当たる。服の時もそれを存分に発揮していたからな。

「むっ、響夜！あそこじゃ！！あの宿がいいぞ！！」

マオは元気よく俺に言う。マオの指さす方向を見ればそこには一軒の宿屋。外装もそこまで悪くなく混んでいるわけでもない。俺はその宿屋へと歩いていくマオの後ろについて行った。

「すみません。」

対人関係はマオでは不安があるので俺が人を呼ぶ。こういうところでは一応敬語を使うぞ？これで外に閉め出されたら堪ったもんじゃない。

「あら？お客さんかしら。」

俺の呼び声で一人の女性が奥から現れる。・・・若いな、20代つてところか。

「どうしました？」

俺がそんなことを考えていると目の前にいる女性は首を傾げる。

「ああ、いえ、美しいものですから。」

「あら、そんなまた。そんなこと言っても負けてあげませんよ?」

俺の言葉に女性は笑って答える。ucci、ダメだったか。勿論そんなことを声に出して言うわけもな、俺は肩を竦めて微笑した。

「.....」

痛い。足を踏むなマオ。止める。マオは不機嫌そうな表情で俺の足を思い切り踏み付ける。

「あらあら、彼女さんが御立腹ですよ。」

女性はマオのそんな表情を見て笑った。いや、こっちからしたら全然笑えないんだけどさ。

「ははは、済みません。一部屋お願いしたいんですけど。」

「はい。どれ位の滞在になりますか?」

「あ.....」

決めてねえな。俺が悩んでいるのを見て女性は言った。

「決めてないなら取り敢えずだけで、後から延長することもできますよ?」

「あ、じゃあそれで。えっと取り敢えず十日間程。」

「三食お付きになさいますか?」

「あ、はい。」

「でしたら銀貨七枚になりますね。」

女性の言葉に俺はマオの持っていた硬貨を支払う。すると女性は差し出された硬貨を取り代わりに一つの鍵を差し出してきた。

「ではお部屋の鍵になります。」

俺はそれを受け取ると未だに不機嫌そうな顔をしたマオを連れて部屋へと向かった。

「おい、何でそんな怒ってるんだ？」

「ふん、響夜など床で寝ればいいのじゃ。」

マオは俺の質問に答えず手から鍵をひつたくと早々に部屋へと入っていく。

「……意味わかんねえし。」

俺はその行動に溜息を吐きながらも部屋へと入りマオの荷物を置く。中はそれなりに広く、綺麗に掃除されていた。こう考えてみるとこの世界に来ての初めてまともな寝床だな。俺はベッドで横なろうと近づくと

「ふん！」

ベッドの上にマオが乗って邪魔してきやがった。俺はもう一つのベ

ツドへと向かおうとするが

「おい。」

そのベッドは先ほど置いたはずの荷物で占領されていた。此奴魔法使いやがったな……。マオは相変わらず不機嫌そうな面をし、ぽいと顔を背ける。俺はその行動にこの日何度目になるのかの溜息を吐くと壁を背にして床に座り込む。

「……………疲れた。」

今までの疲労のせいか目を瞑ると強烈な睡魔が俺を襲う。俺はその衝動に抗えず深い眠りに落ちていった。

殺人鬼から見ても魔王にはとても見えん（後書き）

感想、批判、ご意見がありましたらどうぞ送ってください。（／、
^、）（／、）（。／、）（。／、）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7170y/>

殺人鬼は異世界に来てしまったようです

2011年11月23日15時50分発行